

表紙：五雲亭貞秀「西国名所之内 兵庫磯乃町」 神戸市立博物館蔵

五雲亭(歌川)貞秀(1807-1879?)は、幕末から明治期に活躍した浮世絵師で、開港から間もない頃の横浜の町や外国人などを描いた作品を数多く残しています。本作のような鳥観図を得意とし、「橋本玉蘭斎」の名で地図学者としても活躍しました。

「兵庫磯乃町」は西国街道から兵庫に入る西の入口である柳原惣門(現在の柳原蛭子神社付近)から東に向かって兵庫の町と港を眺めた風景を描いています。町には瓦葺の町屋が密集し、海岸に沿って蔵屋敷が立ち並んでいます。また港には停泊する多くの船、そして海上には沖へ続く帆の列が描かれています。

19世紀半ばの兵庫は、北前船や尾州廻船といった当時を代表する海運を結びつけるハブ港の役割を果たし、港湾都市として活況を呈していました。

裏表紙：長谷川小信「神戸名所之内 相生橋蒸気車」 神戸市立博物館蔵

長谷川小信(二代貞信、1848-1940)は、文明開化期の風景や風俗を題材にした開化錦絵を描きました。彼の錦絵は、神戸や大阪といった都市を舞台にしています。

明治7(1874)年、神戸—大阪間に鉄道が開通しました。新橋—横浜間に続き、日本で2番目の開通でした。相生橋は、その際に神戸駅の東に設けられた跨線橋です。

鉄道開通当時、機関車はイギリス製、機関士もイギリス人で、神戸—大阪間を1日8往復、70分かけて運転していました。相生橋は神戸の名所となり、汽車を見物しようとする人々で賑わいました。この錦絵にも、汽車が橋の下を通るのを一目みようとして詰め掛けた人々の姿が描かれており、相生橋の人気ぶりを物語っています。

出典：神戸市立博物館(画像)、文化庁HP「文化遺産オンライン」(解説)

